



仕舞「玉の段」(2010.10.31 東京喜多能楽堂)

# 能おおしま 革紙

## 第23号

(年2回発行)

発行所

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

## 畏怖の念をもって

喜多流シテ方 大島 衣恵

「能はなんてモダンなんだろう。初めて観たときにね、びっくりしましたよ。」  
日本の高層建築の先駆け、池田武邦氏のお話しを伺う機会に恵まれました。氏は焼け野原となった戦後日本の復興に、建築家として多大なご尽力をされた方です。四国から岡山の稽古場へ熱心に通われた豊蔭さんの妹君、藤本宮司のお引き合わせで長崎の岬に建つ茅葺屋根のご自宅を訪れました。

「いかに無駄を省いて高層建築を作るかと考えていたとき、能に出会った。そんなことは日本の伝統が何百年も前からやっていたのかと本当に驚いた。」何もないところから始まり、また何もない空間に戻って能が終わる。能舞台ではごく当たり前になされていることですが、その在りようをモダンと評されたお言葉が大変興味深く伺いました。

池田先生の手がけられた長崎のハウステンボスは、電気も水も施設内で全て循環する、地産地消のお手本となるべき未来型都市を目指して作られたそうなのですが、「実は江戸の町に習ったのです。」とのこと。自然と共に生き、自然を畏れ敬う日本人本来の姿がいかに大切であるか。「人間は自然に生かされている。自然を畏れ敬う日本人本来の姿がないんですよ。」近代建築を考え抜かれた先に行き着いた答えが、日本の伝統にあるのだとお話しを伺いました。

現代、余りにも人々は欲望に向かい過ぎたのかも知れませんが、未来を思うからこそ、能をはじめ伝統文化の心を、私たち日本人自身が学び直すときののではないのでしょうか。

- P2 へ道成寺へ披き 回顧録
- P4 彦根城能のこと 権藤芳一
- P8 能学習「鞘のむろの木」に挑戦!!

城南中学校二年生

大島輝久

権藤芳一

# 〈道成寺〉披き 回顧録

喜多流職分

大島輝久

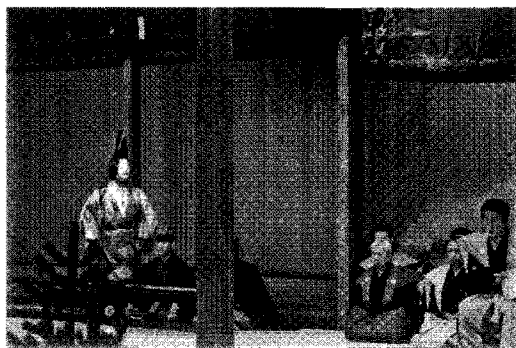
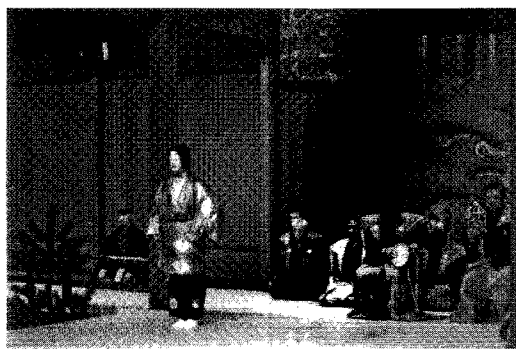
昨年十月三十一日に東京の喜多能楽堂にて道成寺を勤めました。道成寺を披く事が決まったのは本番の約二年前でした。能を勤める時は通常三ヶ月を稽古期間の目安としていますが、この曲に関しては他の能と違う事が余りに多く、先輩方もかなり長期間稽古されていたのを知っていたので決まったら即稽古に取り組みました。

披き物と謂われる曲は幾つかありますが、その代表的な物は猩々乱と道成寺でしょう。この二つに共通して言えるのは、その曲にしかない新たな技術を身に付けなければ舞えないという事です。能の動きというのは決まった基本的な型を組み合わせる事によって出来ている為に曲が違っても技術の応用がきく事が多いのですが、

猩々乱における乱の舞、道成寺における乱拍子は基本を踏まえながらも技術として非常に特化した物です。専用の技術を身に付ける必要があります、それにはかなりの時間と労力を要するのですが、そこにこそ披き物の醍醐味がある事をこの度感じました。

内弟子として上京間もない頃急速に能にのめり込み、稽古を重ねる事で少しずつ自分が上達していくのが分かる、昨日の自分より今日の自分の方が確実に上達していると実感していた、そんな頃の間を久しぶりに思い出しました。

また道成寺は技術と共に大変な体力を要する曲です。先輩方にも道成寺を舞う時は稽古より先ず体力作りから始めたという方が多く、その重要性は分かっていたのですが、なまじ体力に



自信を持っていた私は当初特別な事は何ももしませんでした。しかし本番二ヶ月前に初めて面、装束を付けて稽古した所、途中から完全に息が上がって集中力が落ち、通常の稽古ではあり得ないミスを連発。「このままではいかん！」と一念発起し、後ればせながら体力作りを始めました。稽古後すぐ着替え、そのまま一時間のランニングという毎日を繰り返し、地方公演の時にもランニングシューズを欠かさず持つて行きました。

その効果は確実に表れ、本番一週間前には一曲を通して稽古しても殆ど疲れを感じなくなる程でした。技術、体力共に今出来る事はやってきたと思っていた所、本番三日前に思わぬ事態が起きます。なんとここに来て風邪をひいてしまったのです。風邪の症状は胃腸にきてしまい、殆ど物を食べられない状態になりました。体重は三日間で四キロ程落ち、当日は「最後まで持つだろうか？」と不安に駆られました。ただ本番



が始まってしまえば良い意味で開き直ったのか、体調の事など全く気にならず思った以上に舞台は順調に進行しました。

しかし乱拍子も中盤に差し掛かった頃、突然何かに足が引つ掛かりました。自分の汗でした。普段私はそんなに汗をかく方ではなく、真夏の薪能ならいざ知らず屋内の舞台上で床に滴る程汗をかいた経験はありませんでした。「やはり本番は違う。落ち着け、落ち着け。」と自分に言い聞かせながらも、急速に体力が奪われていくのを感じていました。必死の思いでその後急ノ舞から鐘に入り、暗がりの中で着替えようとした時までも想定外の事態が起きます。脱水症状から両手が痺れ動かなくなってしまうのです。

面の紐をほどく事すら難しく体力は完全に底を尽き、その場に倒れ込んでしまいたい衝動にかけられました。「何の為にここまでやって来たんだ！ 頑張れ！」まるで他人を励ますように自分に言い聞かせなければならぬ程事態は深刻



でした。鐘が上がる直前までじっとしていた結果、何とか手が動くようになり急いで後シテの準備をしましたが、体力は殆ど回復しませんでした。

「まともにやったら倒れるかもしれない」という恐怖心の中、否応なく後シテは始まりました。その後は自分が何をしたら殆ど記憶がなく、ただ「何とか幕まで帰らなければ」とその一心だったように思います。

終演後数日中に賛否両論、様々なご意見や感想を頂きました。頂戴したその数は今までの舞台の比ではなく、多くの方々が自分の舞台を真剣に観て下さった事を実感しました。

自分としては万全の準備をしたつもりでしたが、やはりそこは大曲、多くの課題が残りました。

半年が経った今「いつの日かもう一度道成寺を……」という気持ちが強くなって来ています。



「道成寺」披き 大島輝久 2010.10.31  
東京喜多能楽堂 池上嘉治撮

# 彦根城能のこと

彦根城に博物館を開設するというので昭和五八年頃、その具体的な運営に関する相談が、当時、京都国立博物館の館長であった林屋辰三郎先生のところにあつた。先生は、これからどんどん各地に博物館が出来るだろうが、どれもこれも似たようなレプリカを並べていたのでは駄目で、それぞれ、その地域なり歴史に密接したもので、特色を出さないといいない。彦根なら、やっぱり能とお茶やなア、と見当をつけられ、能は権藤、お茶は熊倉がお手伝いするように、と命ぜられた。

二人とも、林屋先生が主宰されていた芸能史研究会のメンバーだった。熊倉功夫君は、東京の教育大学を卒業後、西山松之助先生の指示で京都に移り、林屋先生の元で茶道の研究を深めている若き学究であつた。(現在は林原美術館館長) 私はその頃、京都観世会館の事務局にいた。

林屋先生は、先に徳川美術館に、名古屋城の能舞台が展示物としてガラスケースの中に死蔵されていることを残念に思っておられ、彦根の能舞台は何とか活用したいと考えられた。そして、博物館の展示には(静態展示)と(動態展示)とがあつて、能舞台は有形建築物として静態展

ごん どう よし かず  
権 藤 芳 一 氏

昭和5年(1930)京都に生まれる。同志社大学文学部卒業。武智鉄二に師事し、雑誌『演劇評論』の編集、前衛・実験劇の演出助手を務めた後、同33年より京都観世会館に事務局長として30年勤務。のち平成元年より大阪学院大学国際学部で古典芸能を講ず。同13年3月退職、現在フリー、演劇評論に幅広く活動。著書に『近代歌舞伎劇評家論』、『世阿弥を歩く』、『能に生きる歴史群像』、『能楽手帖』、『文学の世界』、『双蝶々曲輪日記・本朝廿四孝』(カブキ・オン・ステージ19)、『上方歌舞伎の風景』。編著に『日本の古典芸能8・歌舞伎』、『日本庶民文化史料集成6・歌舞伎』など。

権  
藤  
芳  
一

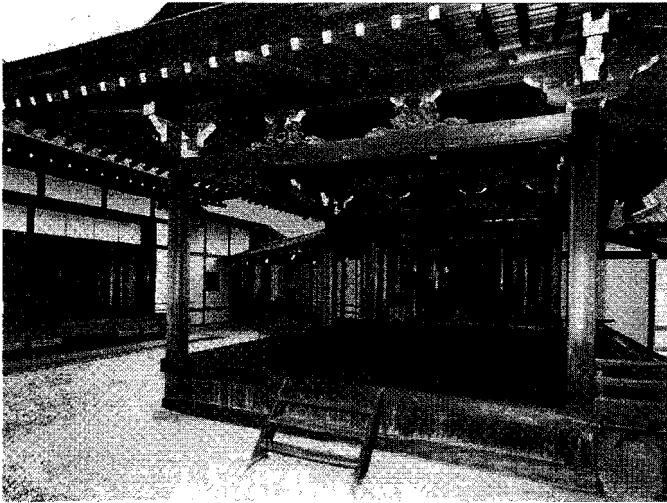
示すが、同時に本来はこういう風に使われていたのだと、動態展示を行って、来観者に見せることも必要だ——とやや強引な理屈づけをして、時に上演も出来るようにされた。だから彦根城能舞台も展示物の一つで、正面席、脇正面席に当る空間も展示室、演能時だけそこにある展示物をのけて、椅子を並べるといふ説明で文部省を納得させられた。最初から見物席を設置すると、劇場法から、またさまざまな規制を受けるので、鏡の間、シテの装束部屋は復元という事で通した。しかし、ワキ、狂言、地謡方の楽屋まで能楽堂並に新しく作ることは出来ず、その点では、今も出演者に御不自由をかけている。見所に当る部分には、普通の補助椅子を並べるのではなく、やや上等の連結した椅子を常備し、正面席床を傾斜も可能と、見易くする配慮をしておいた。

この能舞台は、寛政十二年(一八〇〇)十一代藩主直中の時に建てられた。但し明治年間、表御殿の解体に相前後して、井伊神社に移築、その後、昭和二五年に沙々那神社、同三八年に護国神社の境内にと転々していた。今回、表御殿に関する古絵図の発見や遺跡の発掘調査で、元の能舞台の位置が確定、そこに能舞台を復元、周りに博物館として建築施設を配することになった。だから能舞台そのものは当時のままで、蛙股には井伊家の定紋橘が彫られている。ただ鏡板の松は、長い流浪期間中に剥落していたので、元の輪郭に絵具をのせて修復した。

またこれは、高林白牛口二師に教えられたのだが、この舞台には天井には道成寺の作り物の鐘を吊す滑車はあるが、笛柱には金環はない。江戸時代、彦根藩は喜多流のシテ方を召抱えていた。そして、道成寺演能の時は鐘後見が鐘の綱を環

を通さずにかけていた、というのである。(当時は藩中に二人力、十人力という猛者が何人もいて、後で支えていたであろう。今は無理だし、笛柱に手を加えることも出来ない、従ってまだこの舞台では「道成寺」は公演されていない。)

ともあれ、演能舞台には勿論屋根があり、白洲の上は青天井、見所は別棟といった往時の大名御殿の能舞台の様子を残す唯一の遺構なのである。見所の前方に座ると青空が見え、お城の樹々に飛びかう野鳥の姿が伺える。地方の野外で催される新能のように舞台も見所も仮設とは全く違う、いかにも「お能拝見」という雰囲気だし、上演させる方の気分もちがうと思う。



彦根城博物館能舞台

彦根城博物館の中央に建つ能舞台は、江戸時代の表御殿の中で現存する唯一の建物。明治以降、他の場所に移されたが、博物館の建設にあわせてもとの場所に戻された。

この能舞台の特徴は、舞台・後座(あとざ)・橋掛りの下から見つかった漆喰製の柵(ます)にある。この柵には音響を高める効果があり、当時十分な配慮のもとに設計されていたことがうかがえる。

舞台開きは、昭和六二年(一九八八)二月「翁」を片山九郎右衛門(現幽雪)、千歳・片山清司(現九郎右衛門)、三番三・茂山千五郎で行った。そして彦根城能としては、同年九月、第一回を金剛殿「竹生島・女体」茂山千之丞「鬼ヶ宿」(井伊直弼作)、浦田保利「葵上・梓之出」の番組で行った。こうした催は、出演者を決めてしまうと後々便利なのだが、由緒ある舞台なので、出来るだけ多くの人に使ってもらおう、知ってもらわなければならないと私のこだわりもあって、シテ役は毎回違った方をお願いしてきた。今年で四五回、七一番の能に七〇人のおシテに御出演いただいた。

当初は年二回、春は関西、秋は関東在住の方々、五流満遍にと思いつながら、私の狭い交際関係では、どうしても観世、金剛が中心となった。それと、東京からとなると旅費だけでも高くなるので、春は能二番・狂言一番、秋は能・狂言一番ずつという番組になってきた。

御承知のように、公共団体の事業は、経済状況が悪化すると、まず文化関連の経費が削減される。一度休止になった催は、まず復活しない。私の関係した能関係の催でも、いくつかその経験がある。彦根城博物館もよく頑張っていてくれたが、平成十九年、築城四百年の盛上げを最後に息切れが見え出した。能は彦根城博物館の看板などと、脅したり赚了りたりの交渉の末、年一回一日、能二番・狂言一番、但し京阪神の方々は



能「経政」扇手 大島政允 彦根城博物館能舞台 (2010.9.12)

ほぼ済んでいるので、出演者のレベルを落さないためには、東京や地方の方が多くなるので、経費は従来の一回よりは多くしてくれと頼んだ。

第三者の催す能会を継続することは難しい。三十回まで続いた読売新聞社主催の大阪城新能も遂に今年から中止になった。彦根城能が何とか継続出来るのも、出演者の御理解とご協力があつてのことだと感謝している。

(能の番数とシテ役の人数の合わないのは、一度病気休演代役があつたためである。)



### 第四十四回 彦根城能

平成二十二年九月十二日(日) 午後四時始

於 彦根城博物館能舞台

#### 能

シテ平経政の亡霊 大島 政允  
政 政允  
ワキ行慶法師 村山 弘  
鳥手

(大鼓) 守家 由訓  
(小鼓) 吉阪 一郎

(笛) 帆足 正規

(後見) 高林白牛口二  
大島 衣恵

(地謡) 井上 真也 高林 呻二  
佐々木多門 長島 茂  
内田 成信 友枝 昭世  
大島 輝久 友枝 雄人

#### 狂言

#### 文相撲

大名 松田 高義

太郎冠者 奥津健太郎  
坂東方の者 野口 隆行  
(後見) 藤波 徹

#### 能

ツレ・侍女 大島 輝久  
ツレ・侍女 栗谷 浩之  
シテ・女・後二鬼神 出雲 康雄  
ワキツレ・從者 小林 努  
ワキ・平維茂 原 大  
ワキツレ・勢子 有松 遠一  
ワキツレ・勢子 岡 充

(大鼓) 守家 由訓 (太鼓) 前川 光範  
(小鼓) 吉阪 一郎 (笛) 杉 信太郎

#### 紅葉狩

(間) アドアイ・供女 伊藤 泰  
オモアイ・式内之神 野村小三郎  
(後見) 高林白牛口二  
高林 呻二

(地謡) 井上 真也 狩野 了一  
内田 成信 大島 政允  
友枝 雄人 友枝 昭世  
佐々木多門 長島 茂

# 能学習「鞍のむろの木」に挑戦!!



●初めて能学習に行つて能を見た時は感動したと同時に、こんなのを私達が出来るのか不安になりました。先生に舞をすめられてやる事になったけど、初めの練習では思いどおり動けず難しかったし、舞を覚えるのが大変でした。何度も「無理」だと思つたけど、大島先生方が優しく親切に教えてくれたので頑張れる事が出来たと思います。初めて袴を着てみた時は、いつもと違ってやる気が出てきました。

本番は多くのお母さん方が来ていてすごく緊張しました。いつも以上に声を出して舞をする事が出来てよかったです。今までで一番いい舞が出来たと思います。地謡などの人達も、正座をしながら頑張つて声を出しててすごいと感じました。これは、みんなが頑張つてくれたから成功出来たんだと思います。これをバネにして、これからの学校行事などで役に立てていきたいです。つらかった時もあつたけど、成功してイイ思い出ができました。

●最初、能楽堂に行つて、大島先生たちの能を見たときは、とても感動しました。

でも、実際自分たちがやってみると、正座にはたえられないし、なかなか自分の読むところを覚えられなく、本当に本番成功できるのかなあ?と思つていました。

話を覚えるのは、とても大変でした。長いし、アクセントがあるところや、のぼすところや、音程が上がつたり下がつたりするところなど、覚えることがたくさんありました。

あと、動きもありました。しかも、私達のパートは5人しかないのです、大きい声も出さないとはいけません。こんな大変な練習の中にも楽しいこともたくさんありました。謡うところをみんなで何回も謡つて覚えたこと、動きも、大島先生に教えてもらいながら少しずつ覚えていきました。

できるようになったときは、本当にうれしかったです。だから、本番が成功してとつてもうれしかったし、舞台にいるときはとても楽しかったです。能をやつて、良かったなあと思いました。

●今回、総合学習で能を学びました。最初能をやると聞いて、いやだなあと思つていました。だけど、能楽堂に行つて、能のことや舞を実際に見ていると、つい引きこまれてしまいました。そのとき能のお面はかぶつていなかつたけど、先生のお話の中に、お面の角度で表情が変わるときいて、とてもおもしろく思いました。だけど、実際やってみると謡本を見るのがとても難しく、声を出すのも大変でした。だけど、だんだんやつていくうちに、謡本を読むのも楽になり、家でも声出しの練習とかもできるようになりました。しかし、私にまだしれんが残っていました。“覚える”ということですが、楽譜とかは、覚えるのはそこまで大変ではないですが、文字を覚えるのは、私の大の苦手です。なので、覚えるときいた瞬間、とてもいやでした。だけど、何とか覚えて、本番に望むことができました。そして、みんなと合わせてやることのたのしさやうれしさが最後には分かり、能がたのしく、将来、能をやりたいとも思いました。今回の能の学習でいろんなことを学び、いろん





なことを発見しました。能のおもしろさ、みんなであわせる大変さ、これらのことを学ぶことができました。今回の取り組みで学んだことを、これからの生活、学校生活で生かしていきたいと思いました。大島先生やこれをやらせてくれた学校の先生に感謝です。ありがとうございます。

●私は、大島能楽堂が城南の学区にあることを初めて知りました。いつも何気なく通っていたところが能楽堂だったなんて思いもしませんでした。そして、テレビなどでしか見たことのない能がこんなに身近にあるもんなんだと思いました。

私は笛をしました。譜面を覚えても同じものをくり返すことが多かったのですが、何も考えずに吹いていると、「今、何回したかな」と忘れてしまうので、とても集中力がいるということが分かりました。たぶん、笛だけじゃないと思います。そういうところは能ってとても難しいんだなと、とても感じました。小学校のときにやったことはないし、日本の笛はしの笛しか吹いたことがありませんでした。しの笛やフルートとはちがいが、強い息で吹かないと音がかすれて出なかつたので、能管のむずかしさがとても分かりました。初めて袴を着たので、とても心に残っています。笛も本番ではしつかりまちがえずに吹けたので、とてもよかったです。母からも「とてもよかったです」と言ってもらい、とてもうれしかったです。今回の能の取り組みがまんする力をつけることができました。この力は、集中する力や人の話をきく力などいろいろな力につながると思います。なので、これから学校の授業や部活など、毎日の生活の中で生かしていきたいと思っています。

●私は「能」というものを初めて体験しました。一番最初に大島先生たちの能を見せていただいたときには、こんなのが私たちにできるのかなあと心配でした。

能の練習が始まって、はじめは正座すらまともにできませんでしたが、でも、練習を重ねていくうちに、だんだんとずつと正座をしても大丈夫になってきたし、地謡のリズムや歌詞も覚えてきました。

しかし、はじめは声が小さくて何回も怒られました。私も、はじめのうちは、他の人が声を出してくれるのを待っていました。でも、大島能楽堂の方や学校の先生がとても熱心に指導してくださっているし、舞や笛の人も頑張っているのに、地謡のせいで発表会が成功しなかつたら申し訳ないと思うようになりました。そして、一人一人が声を出さないと、良い発表にはならないから、ちゃんと声を出そうと思いました。

発表会はとても緊張しました。ちゃんと成功させることができて本当によかったです。私たちは迷惑をかけてばかりだったのに、熱心に指導してくださった大島先生たちには、感謝の気持ちでいっぱいです。私は日本の伝統古典芸能の「能」を体験して本当によかったと思います。城南の卒業生の大島先生たちが活躍していることを城南生として誇りに思い、「能」を大切にしていきたいです。



能「砧」大島政允 大島能楽堂 (2010.9.19)

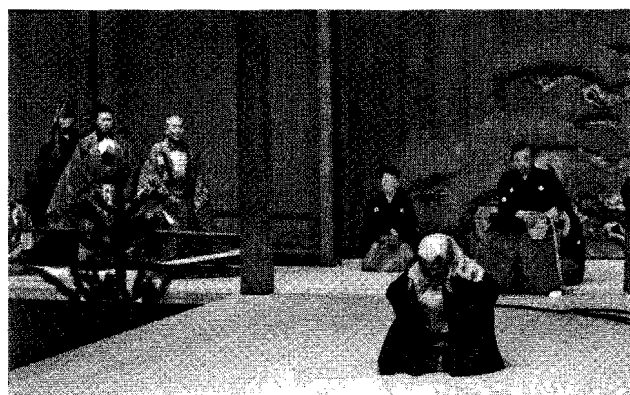


能「景清」大島政允 東京喜多能楽堂 (2010.10.31)





能「黒塚」大島衣恵 大島能楽堂 (2010.11.21)



能「鬼界島」大島政允 東京喜多能楽堂 (2010.11.28)

photo. 池上嘉治

## 2011年 演能ご案内

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月17日(日)	第224回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「月宮殿」 金子匡一 狂言「附子」 茂山あきら 能「千寿」 大島衣恵
5月5日(祝)	お能で遊ぼう	10:30	リーデンローズ練習室	無料・要申込	おうたい・紙芝居「こかし」
5月15日(日)	喜多流春の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	能「清経」 舞囃子・仕舞・素謡等
6月19日(日)	第225回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	狂言「伯母ヶ酒」 茂山宗彦 能「隅田川」 大島政允
6月28日(火)	2011年 アジア能楽公演ツアー	18:00	国立能楽堂(東京)	前売券 5,000円 (学生3,000円) 当日券 6,000円 (学生4,000円)	半能「高砂」 大島政允
6月30日(木)	〃	18:00	金剛能楽堂(京都)		英語能「PAGODA」大島衣恵 ジャネット・チョング作 リチャード・エマート節付監督
7月3日・4日	〃	19:15	国家大劇院(北京)	招待	
7月6日(水)	〃	19:45	香港演藝學院	580-150港元	
7月28日(木)	福山八幡宮新能	18:30	福山八幡宮	前売券 4,000円	未定
8月7日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光信寺 (神石高原町)	前売券 3,000円	狂言「伊呂波」 井上靖浩 能「鶴」 大島政允
9月18日(日)	第226回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「枕慈童」 大島衣恵 狂言「水掛簀」 茂山正邦 能「熊坂」 大島輝久
10月16日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡等
11月8日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・能舞「西王母」
11月20日(日)	第227回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「花筐」 大島政允 狂言「清水」 茂山千三郎 能「雷電」 松井彬



城南中学校図書室にて (2011.2.3)

### 喜多流大島能楽堂

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2  
TEL 084-923-2633  
FAX 084-923-8730  
<http://www.noh-oshima.com>

### 編集デスクより

- 3月11日に発生した東北関東大震災で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。
- 今も手つかずのままの膨大な量の瓦礫の山、未だ沢山の方々が行方不明、福島原発の汚染水が大量に海に流れ込むという最悪の状況に追い込まれている。人類が進歩、発展と思って推し進めてきたことへの大自然からの痛烈な警告であろう。
- 6月末より英語能「パゴダ」アジアツアー、東京・京都・北京・香港四ヶ所五回連続公演。言語を越えて能の秘めたる力を伝える舞台にしたい！ 生きる勇気が湧いてくる舞台にしたい！ アメリカ人、イギリス人、中国人、そして我々日本人それぞれの持てる力を発揮して成功させたい！
- 若者に能を伝えたい！ 1999年初めて頼小学校で能授業をさせていただいてから12年になる。福山市内数校の小学校と府中市、笠岡市、岡山市、尾道市、神石高原町、広島市等の小学校に出向いている。本年は城南中学校2年生197名、一ツ橋中学校1年生116名、能授業の成果をあげることが出来た。「整姿する、共生することで己を見つめ直す」能の持つ秘めた力が青少年の健全育成に役立っている。 大島泰子